

魔法の種 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 亀田 隼人 所属: 東京都立南花畑特別支援学校 記録日: 平成29年2月23日
キーワード: 移動支援、音声、QRコード、自己肯定感、コミュニケーション

【対象児の情報】

- ・ 学年 中学3年男子 ・ 障害名 知的障害 てんかん
- ・ 障害と困難の内容
 - ◆太田ステージIII-1前期 SM 社会生活能力検査 SA 2歳5ヶ月 SQ 19
 - ◆2歳程度の言語理解があった。目的物が目の前にあれば指示を聞いて片づけたり取ってきたりできたが、注意が転動しやすく、移動などが伴うと目的から逸れてしまいがちであった。
 - ◆発声に、指さしや自分なりのサイン（手を振って「歌って」など）を合わせて要求や報告ができた。
 - ◆大変人懐こい性格で、友だちが楽しんでいる輪の中に積極的に入っていき、一緒に笑う姿もあった。

【活動目的】

- ・ 当初のねらい
 - ☆ 目的地まで安全に移動する
 - ☆ 忘れた目的を思い出す
- こととした。また、移動場面を利用して、
 - 本人が困ったときに自分自身がとり得る対処方法を探ることとした。
- ・ 実施期間 平成28年6月～平成29年1月
- ・ 実施者 亀田隼人、対象児の母親
- ・ 実施者と対象児の関係 対象児の担任および保護者

【活動内容と対象児の変化】

- ・ 対象児の事前の状況
 - (1) 自宅とスクールバス停の往復（小学部期～）

保護者が付き添って移動した。担任との相談で段階的に離れていき、中学部2年時には3m離れた所から追行することが可能になった。保護者は、一人で目的地まで安全に移動できるようになってほしいという願いはあるが、このやり方には将来性がないと感じていた。

- (2) 校内の教室移動（小学部期～）

対象児は、校内の各場所の名称や位置は理解していた。しかし、途中で気になるもの（スクールバスや掲示物など）があるとそれらに見入り、目的地に辿り着けなかった。また、目的を逸したことを教員に指摘されると嫌な気持ちになり泣いたり怒ったりする様子をみせた。

外部専門家として校内に出入りするPTなどから目的をその都度確認できるように写真カードを携帯する方法を提案していただいたが、写真カードは本人の意思がないと見ることができないため効果がなかった。そのため、校内でも大人と一緒に行動することが多かった。



- ・ 活動の具体的内容

(1) 校内移動支援をするターゲットルートの選定

6月に1週間校内移動の様子を観察した。その結果、給食時の移動「教室→食堂」や下校時の移動「教室→玄関」の2ルートではほとんど目的から逸れることなく一人で移動できることがわかった。ターゲットルートとしては、比較的目的を維持できていた「保健室→教室」「食堂→教室」の2ルートを選定した。また、目的から逸れる理由として、本人のモチベーションが関係しているのではないかと

と推測した。

(2) シミュレーターによるルート理解の確認

年度当初に行った生徒の引き継ぎでは、対象児は校内の各場所の名称や位置を理解しているとのことだった。そもそもそれは本当なのかを検証するため、ターゲットにした2ルートの理解を keynote によるシミュレーターを使って確認した。

シミュレーターの操作を覚えると、正しいルートを選択して目的地に辿り着けるようになった。結果、対象児がルートを正しく把握できていることがわかった。



(3) 「魔法のナビ」による移動支援

対象児の移動のポイントとして、「目的を維持するためのもの」と「目的を忘れてしまったときの助けになるもの」は必要だと考えた。(2)の結果から、この2つを満たすツールとして「魔法のナビ」(※)を用意し、移動支援を開始した。

開始直後からモニターをしっかりと見ながら移動できた。ナビの画面と実際に移動している場を対応させながら目的地に寄り道することなく到着することができた。

しかし、画面に見入ってしまうことで、階段につまずき転倒しそうな様子が見られた。これが校外で起こった場合は特に大きな事故に繋がりがかねないと考えた。また、対象児が「魔法のナビ」を使う様子は、真新しい画像に関心を示しているというだけで、本人にとっての喜びを感じることができなかった。対象児の移動支援には、移動自体にモチベーションがなければならぬと反省した。

(※)「魔法のナビ」: keynote で作成。各ルート上の分かれ道で、正しい道が矢印で示されるもの。



(4) 対象児に有効なモードの検証

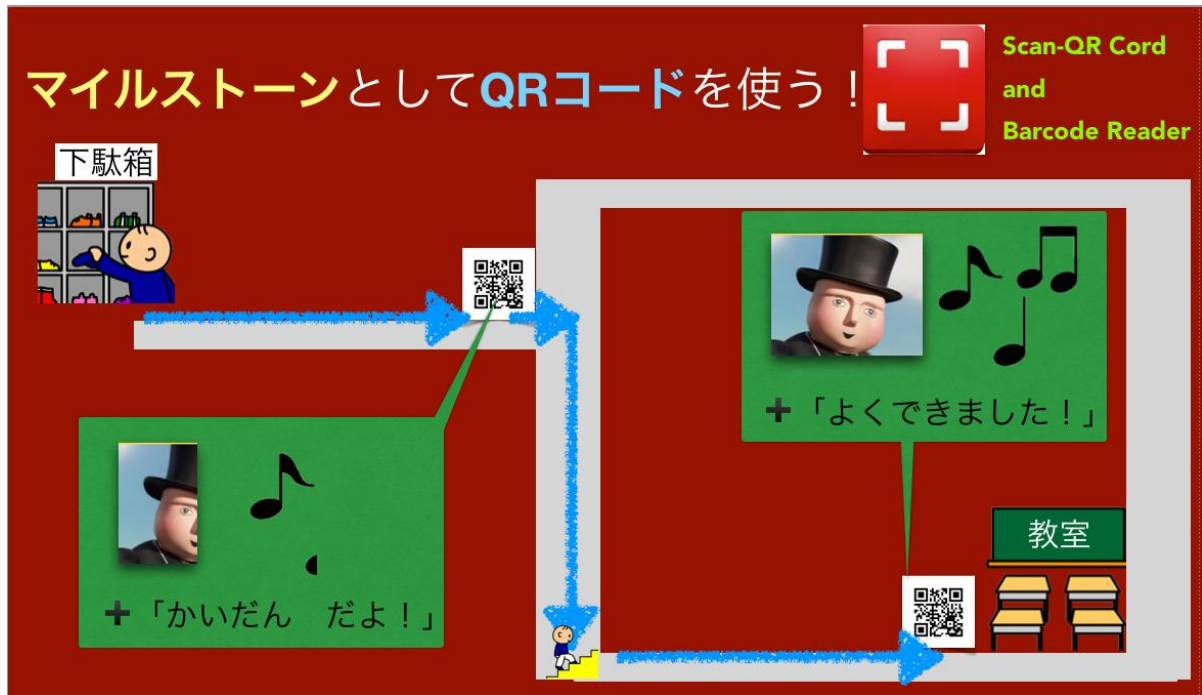
対象児のモチベーションとなる要素を再検討した結果、「人との関わり」に注目した。一緒に笑う、気持ち(おいしい、かわいいなど)を共有しようとする人懐こさは大きな強みだと考えた。そこで、人との関わりを移動場面に取り入れることにした。

「ByTalk for School」を使用し、朝晩のあいさつと対象児が家庭でしている手伝いであるゴミ出しの報告をやり取りした。その結果から対象児にとって有効なモードの検証を行った。



(5) QRコードを利用した移動支援

正しい道や気をつけるべきポイントを音声で聴ける QR コードを作成した。QR コードには、対象児の読み取ることへのモチベーションを高めるために、好きな歌の一部が併せて聴けるようにした。移動ルート上で、対象児がつまづきがちなポイントに QR コードを貼っておき、対象児が手持ちの端末で QR コードを読み取ることで目的を思い出すようにした。目的地には好きな歌がフルコーラスで聴ける QR コードを貼っておいた。読み取るアプリには、操作がシンプルで、対象児が一人で操作できる「Scan-QR Code and Barcode Reader」を選んだ。



・対象児の事後の変化

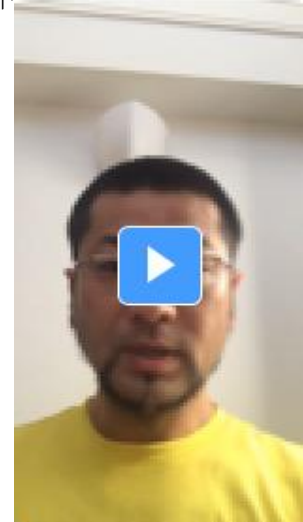
(1) 「ByTalk for School」でのやり取りから

朝晩のあいさつでは、報告者からの表情スタンプによる返信や、ゴミ出しの報告に対してご褒美として送った、本人が好きなキャラクター画像に喜ぶ姿がみられた。

ゴミ出しの場面では、ゴミ出しの依頼を動画や電話で行った。動画での依頼には、動画に映る報告者にお辞儀をしたり笑顔をみせたりしたが、依頼に応じてゴミ出しをすることはなかった。その様子を見ていた母親が言葉で「ゴミ出し」というと動き出した。

一方、電話での依頼には、母親が何も言わなくても自らゴミ袋を持ちゴミ捨て場に向かった。

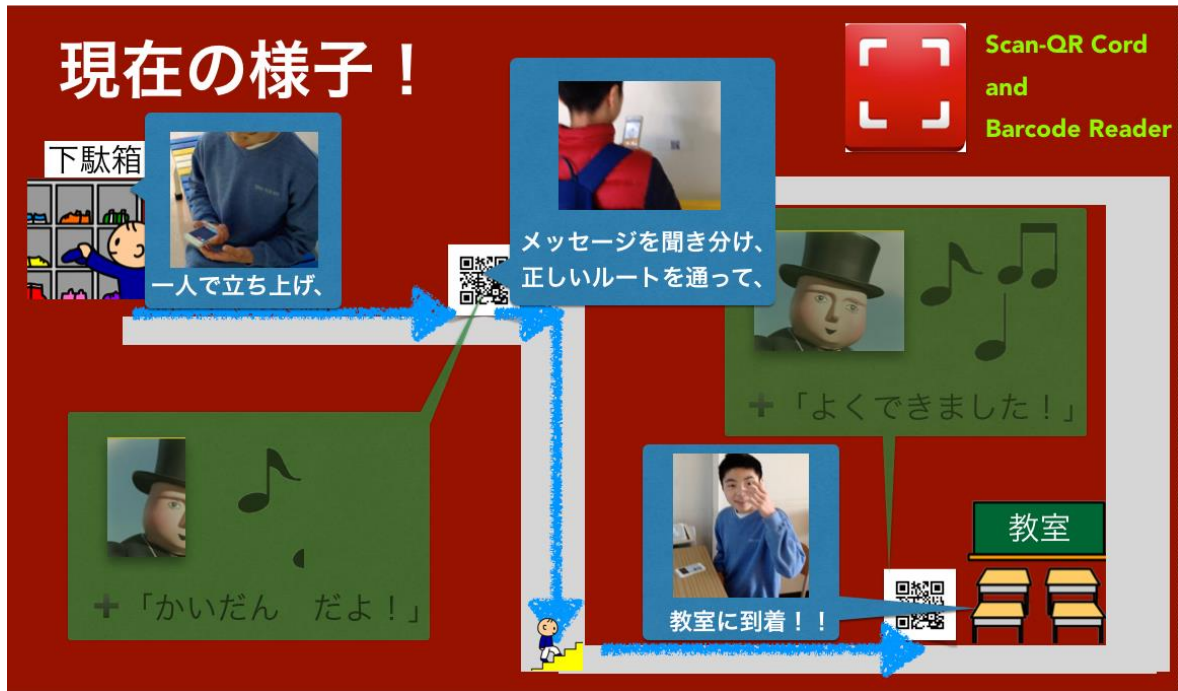
スタンプでのやり取りは母親と一緒に操作を行っていたが、繰り返す中で、自らスタンプを選ぼうとする姿もみられるようになった。



(2) QRコードを利用した移動支援

一人でアプリを立ち上げ、QRコードを読み取り、メッセージにあるルートを通して、目的地にたどり着けるようになった。

メッセージの内容（ルート）は何度か変更したが、その都度聞き分けて目的地にたどり着くことができた。結果、対象児は校内での移動場面では、目的から逸することがなくなり、教員からの指摘を受けることがなくなった。また、校内ではほとんどの移動を一人でできるようになった。



【報告者の気づきとエビデンス】

(1) 対象児にとって有効なモード

「ByTalk for School」でのやり取りでは、画像や動画に喜ぶ姿がみられた。このことから、対象児は画像や動画を理解していると考ええる。

後の学校における他の学習場面では、キャラクターシールをもらうことを励みに意欲的に取り組む姿もみられるようになった。しかし、困った時などに必要情報を得て行動を修正するため、つまり「目的を思い出すため」には、画像や動画よりも音声の方が効果的だった。は強すぎる刺激なのではないかと推察する。これらのことから、必要情報が音声で入ったQRコードは、対象児にとって「思い出し機能」を有していたと考える。

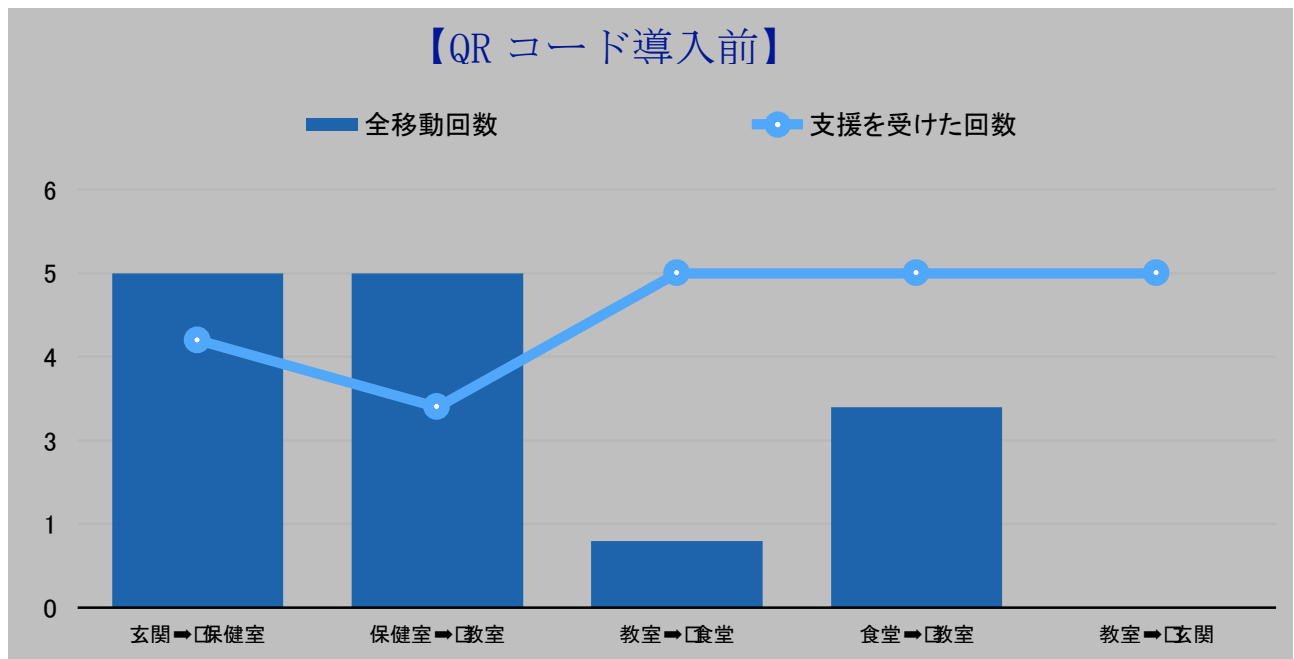


(2) 本人のモチベーション

対象児は、支援開始以前は移動の各場面で教員からの直接的な支援を受けていたが、QRコードを利用するようになってからはほとんどなくなった。

QRコードに対象児が好きな歌の一部を入れたことや目的地に貼ったフルコーラスの歌が聴けるQRコードが、本人の移動意欲を高めたものとする。対象児の自立した安全な移動には、移動自体にモチベーションを高めるものが必要だと考える。

移動中に支援を受けた回数の比較



(3) モチベーションの変化

対象児が学校で担っている健康観察表を提出する係活動場面では、QRコードを読み取って歌を聴いたり、キャラクターシールをもらったりすることがなくても、一人で教室と保健室を往復し係活動完了時にできたことを褒められると大きな笑顔を見せるようになった。

このことは、対象児のモチベーションは歌や画像にもあるが、相手に褒められる、つまり人と関わることにも出るようになったということだと考える。評価されることの積み重ねは自己肯定感を高めるのではないかな。



【今後の見通し】

(1) QRコードを校外の移動場面で活用する！

校内移動場面で有効だった QRコードを通学場面などの校外でも活用したいと考える。対象児の生活空間を広げるとともに、校外でも成功体験を積むことで、意欲や自信をさらに高めてほしいと考える。また、その結果として、小学部段階から行ってきた保護者の付き添い支援が少しでも軽減されることを願う。

QRコードを校外移動場に導入するにあたっては、対象児に確実に届くメッセージを用意できるよう言語理解の状況をしっかりとアセスメントする必要がある。

(2) 画像、動画を使った豊かなやり取りを目指す！

対象児は、校内移動場面において人との関わりが行動への励みになった。また、取り組みを通して画像や動画を使ったやり取りの楽しさに気づき始めた。さらに、ご家族が、対象児にとっての画像や動画の有効性を感じるようになった。画像や動画は、移動場面での到着報告やご褒美だけではなく、対象児が日々感じているたくさんのおもいを伝える手段の一つとして、今後も使っていきたいと考える。